

没後100年 河崎蘭香 × 生誕130年 高畠華宵

平成30年 6月26日【火】～8月19日【日】

ともに明治期の愛媛に生まれ、美人画で名をさせた二人の画家が居ました。一人は八幡浜出身の河崎蘭香(1882-1918)、もう一人は宇和島出身の高畠華宵(1888-1966)。今年は、ともに没後100年/生誕130年という節目を迎えることから、コレクション展において、小規模ながら特別展示を開催することといたしました。

華宵は、独自の色香を漂わせる少年少女や女性の絵で、竹久夢二と並ぶスター画家として一世を風靡し、現在もなお評価の高い存在なので、ご存知の方も多いでしょう。かたや蘭香は、菊池芳文・寺崎広業に師事し、柔和な美人画を得意とした女性画家でしたが、37歳で夭折したこともあり、今や知る人は多くないかも知れません。昨年度、当館では蘭香を初めて取り上げた展覧会を開催し、ようやく研究・再評価の基盤に乗ったと言えるでしょう。

独自の美人画の表現を確立した二人。今回は、両者の作品が一堂に並び初めての機会です。個性や技法の違いなども比較しながら、ご鑑賞いただければ幸いです。なお、華宵の作品は、高畠華宵大正ロマン館(東温市)からの拝借品も交えて、展示いたします。(長井 健)



河崎蘭香(小女春遊通図)大正4年(1915)個人蔵



高畠華宵(桜花令嬢)昭和8年(1933)当館蔵

Collection exhibition

コレクション紹介

平成29年度新収蔵品より

熊谷 守一《桃》



《桃》1941年 愛媛県美術館

今年4月から6月にかけて当館で開催された熊谷守一展。この展覧会準備中に愛媛にやって来るべく見つけたのがこの《桃》でした。画家の熊谷守一(1880-1977)は猫や虫など身近な小さな生きものを、油彩画にはめずらしい輪郭線によるはっきりとした形と鮮やかな色により描いた「モリカズ様式」と呼ばれる独自の画風により広く知られています。この熊谷と愛媛を繋いだのが、今治市出身の洋画家、野間仁根(1901-1979)です。二人は、所属していた二科会のスケッチ旅行などを通して交流を深め、1938年に野間は熊谷に対して二人展の開催をもちかけました。最初、熊谷にとって絵を売ることは「いやらしい」ことであったようですが、この二人展開催から3年後の第28回二科美術展覧会場で熊谷から直接野間に贈られたのが《桃》でした。絵を売ることを教えてくれたと言う野間に対する熊谷の感謝の証だったのではないのでしょうか。

少し寂しげな風景の中で、風にそよぐ桃の花の塊が大らかな筆でとらえられたこの作品は、その後の「モリカズ様式」の始まりを予感させ、画業の展開を考える上でも重要な作品です。二人の画家の関係性を象徴するこの一枚。熊谷から野間へ、野間から愛媛へのギフトのような一枚に感じられます。(喜安 嶺)

Topics

愛媛出版文化賞 奨励賞 受賞

「生誕140年杉浦非水 開花する モダンデザイン」

愛媛県美術館 長井健、喜安嶺編集
「杉浦非水展」実行委員会 発行

2017年に開催した杉浦非水展の図録は、ご記憶でしょうか。当館の7,000点に及ぶ非水のコレクションを軸に、非水の活動の詳細をたどる展覧会の図録として刊行し、実に見応え、読み応えのある1冊となりました。

その図録が、今年1月に愛媛の優れた出版物を顕彰する「第33回愛媛出版文化賞」(公益信託愛媛出版文化賞基金、愛媛新聞社主催)の美術部門で奨励賞を受賞しました。研究の基礎資料となるべきことはもちろん、非水の図録ということもあり、デザインにもこだわり、思いを込めてまとめあげた1冊が評価されたことは、担当者はもちろん美術館にとってうれしいニュースとなりました。



Canforo カンフォロとは? イタリア語で「くすのき」を意味します。愛媛県美術館の中庭に立つ3本の大きなくすのきにちなんでつけられました。

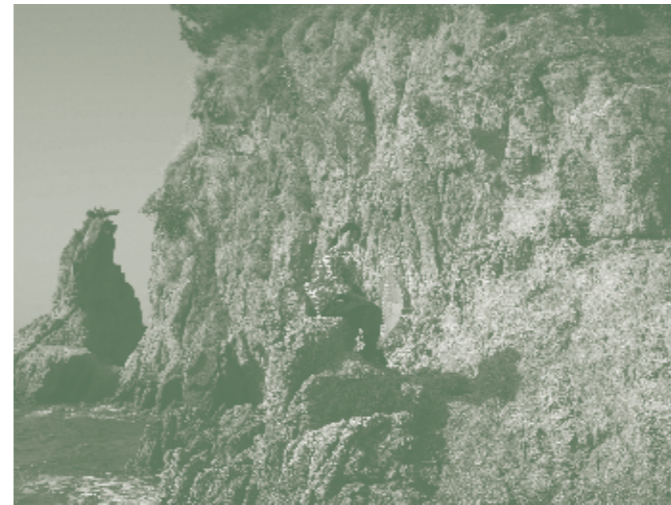


梅佳代「坊っちゃんたち」2017年 © Kayo Ume



三沢厚彦「Cat」2013-03 2013年 樟, 油彩 Photo: Kei Okano © Atsuhiko Misawa, Courtesy of Nishimura Gallery

企画展 2018年 6月30日【土】
～9月2日【日】



浅田政志「坊っちゃんアイ2018」より 2018年 ©Masashi Asada

夏目漱石が1906(明治39)年に発表した『坊っちゃん』。約2週間で書き上げ、正岡子規の遺志を引き継いだ高浜虚子が主宰する文芸誌「ホトトギス」に掲載されました。漱石が帝大時代の親友・子規の生まれ故郷である松山市の学校に英語教師として赴任したのは明治28年のこと。道後湯之町の初代町長伊佐庭如矢により改築されたばかりの道後温泉を始め、漱石自身が体験した当時の松山の風物が、物語の中には少なからず反映されています。

時は2018(平成30)年、奇しくも道後温泉本館が耐震化工事を目前に控えたこの年に、道後で開催されているアートイベント・道後オンセナート2018とのコラボレーションとして開催する本展は、その名の通り、「坊っちゃん」をテーマにオンセナートに参加している

主催:「坊っちゃん展」実行委員会(愛媛県、テレビ愛媛)

坊っちゃん



祖父江慎「坊っちゃん本棚」Shin Sobue 2018 Photo: Tadashi Nakamura

作家の内、祖父江慎、梅佳代、浅田政志、三沢厚彦の4名が独自の視点で取り組む魅力満載の内容となっています。

写真家の梅佳代による「坊っちゃんたち」は、この道後温泉本館で市内の中学校の野球部生徒たちを生き生きととらえた作品群です。また、同じく写真家の浅田政志は、「坊っちゃん」で描かれる印象的な情景を撮り下ろし、自らマドンナに扮しターナー島(四十島)での撮影も敢行しました。彫刻家の三沢厚彦は、漱石が同時期に執筆し、「坊っちゃん」が発表された「ホトトギス」にも連載をしていた『吾輩は猫である』の主人公の猫や、漱石をモチーフにした新作を手がけます。

最後に、本展のアートディレクションも務めるブックデザイナーの祖父江慎は、文字のスペシャリストとして『坊っちゃん』に多大な執着を寄せており、これまでに出版された関連書籍の蔵書はおおよそ700冊にも上ります。祖父江自身20年来の念願だった「坊っちゃん展」。多数の「坊っちゃん」関連資料も合わせて、改めて「坊っちゃん」の魅力が多角的にご紹介します。(杉山 はるか)

つぶやき



この4月に美術館に赴任し、せっかくなので、美術作品の鑑賞だけでなく、各種講座にも挑戦しようと思い、熊谷守一展のワークショップ「たいけんモリのまなざし」に参加しました。普及レポートにもあるように、熊谷の作品の色を変えてみるだけですが、奥は深く、錆びついた想像力と創造力を奮い立たせるいい機会になりました。皆さんも美術館で、「みるん」も「するん」も楽しんでください。(水口 洋)

pick up アトリエ教室

みなさん、愛媛県美術館には「県民アトリエ」があるのはご存知でしょうか？美術館では、創作のできるスペースとして2つのアトリエを無料で開放しています（予約制）。個人利用を原則としてアトリエにある機材を使って、どなたでも自由につくりたいものを自分のペースで制作することができます。「アトリエ1」では版画関係、「アトリエ2」では染色、織り、紡ぎ、木工、写真など多目的に使用することができます。

しかしながら、版画をしたいけれども制作方法が分からない。染色や織り、紡ぎをしたいけれども道具の使用方法が分からない。そんな方はいませんか？

心配ご無用です。そんな方には「アトリエ教室」をおすすめします！「アトリエ教室」では、アトリエの機材や道具を使った作品制作の手順を習得できます。シルクスクリーン・銅版画・リトグラフ・染織・織り・写真など、美術館で対応可能な内容を希望に応じて実施しています。ご希望の際は2週間前までにお申し出ください。（檜垣 正）

○アトリエ1（版画関係）＝第1・3水・土曜日

○アトリエ2（染織ほか）＝第2・4水・土曜日

※都合により変更、お休みする場合があります。



普及レポート

一日講座「たいけんモリのまなざし」

4月28日(土)・29日(日)・30日(月・祝)・5月3日(木・祝)・4日(金・祝)・5日(土・祝)

この春、熊谷守一の展覧会に合わせて、熊谷が関心を寄せた闇の光や色と色との関係を考えるワークショップを開催しました。

ワークショップでは3つのメニューを用意しました。

1つ目は、闇の体験。熊谷初期の作品に、闇の中、わずかな光で対象を捉えた作品があり、暗闇の部屋でわずかな光源を手がかりにももの見え方を観察し、その様子を絵に描きとめるというものです。わずかな光でもものが認識できることに気づいたり、聴覚や歩く感覚を通して闇を感じたり、光によるものの輪郭線を理解されたりしました。

2つ目は、熊谷の《瓜》と《赤蜻蛉》を使って、色や配置を考える体験。作品に描かれている瓜やトンボを抜き出したものとその色や大きさを変えたものが自由に置き換えられるキットを用意し、自分なりに配置してみて、熊谷の実際の作品と比べてみるというものです。自分と熊谷の配置を比べて、家族や知人と違いを話し合う様子もうかがえました。

3つ目は、明快な色彩と単純なかたちを特徴とした熊谷の《山椿》《朝のはぢまり》の色を変えてみる体験。熊谷は同じ図柄で色や形、絵の具の塗り方を変え、いくつもの作品をつくっています。熊谷作品から起こした型紙に合わせて、色紙を切り、台紙に貼り、それぞれの《山椿》《朝のはぢまり》をつくりました。色選びを楽しむだけでなく、配置や花の数を変化させる方もいました。

今回のワークショップでの体験を通して、熊谷が制作の上で興味を寄せていたことや熊谷の作品について少し考えていただくことができたのであれば幸いです。（石崎 三佳子）



Column 来館者の声<アンケートへの回答>

美術館で来館者の方と直接お話しをして、ご意見を伺ったりこちらの意図をご説明したりする機会は意外と少ないものです。そこで、当館でもアンケートを用意し、来館者のお声を伺うようにしています。

これまで、「展示室の順路が分かりにくい。」や、「広報の遅れ。」などのご意見に対しては、担当者に伝えその都度改善を図っています。しかし、要望があったからといって変更できない事柄もあります。何時までも、意見が届かない！と思っておられる方もいらっしゃるかもしれません。遅まきながら、アンケート記載場所に返答をさせていただきますことにしました。

最初に掲示した内容は、2つ。「展示室の照明をもっと明るくしてほしい！（回答1）」「シャープペンシルはなぜ禁止なの？（回答2）」です。美術館では、適切に作品を保存するとともにお客様に気持ち良くご覧いただくために、いくつかのルールを作り、来館者の方々にご協力をお願いしています。これに基づいて、来館者のお声に下記のように回答し、アンケートの設置場所に掲示しています。

これからもアンケートを通じて、来館者の方のご意見をお伺いしながら、親しまれる美術館を目指して頑張りますので、アンケートに皆様のお声をのせていただければ幸いです。（田代 亜矢子）



回答1

展覧会では、数か月の間、照明を当て続けることとなりますので、退色を防ぐため照度を落ととしています。外光が明るい季節になっているので、少しずつ目を暗さに慣らしてから、ゆっくりとご鑑賞いただければ幸いです。

回答2

展示室内では、作品保全のため万年筆やボールペン等の油性の筆記用具の使用をお断りしています。それに形状が酷似するシャープペンシルにおいても、こちらからのお声掛けでご迷惑をかけることを最小限にするため、同様に使用をお断りしております。ご理解、ご協力をお願いいたします。

当館は今年11月に開館20周年を迎えます。開館時から美術館を利用いただいている方をみかけると、美術館に関わる者としてうれしいものです。これからも来館者に繰り返し足を運んでいただける美術館として歩み続けられたらと思います。11月の開館記念イベントの日も皆さんとともに盛大に祝うことができれば幸いです。（石崎 三佳子）

ご利用案内

■開館時間 9:40～18:00(入室は17:30まで)

※企画展及び貸展については、入室時間が異なることがあります。各展覧会のページでご確認ください。

■休館日 月曜日

(祝日、振替休日及び第1月曜日に当たる場合は開館し、その翌日が休館日。年末年始は12/29～1/3が休館日)



ハトの声
編集後記



子どもが本物に触れる体験の必要性は多くの方がいわれています。美術館で生の作品を間近で見ている子どもたちは、とてもよい表情をしています。心惹かれる作品との出会いは、これから生活に影響を与えることもあるかもしれません。ぜひ感動いっぱい美術館においでください。（二宮 茂樹）

川端康成と東山魁夷

巨匠が愛した美の世界

企画展

平成30年 9月1日[土]～10月21日[日]

主催／川端康成と東山魁夷展実行委員会（愛媛県、愛媛新聞社）、公益財団法人川端康成記念会

日本人初のノーベル文学賞受賞作家である川端康成(1899-1972)は、優れた美術品コレクターとしても知られます。「知識も理屈もなく、私はただ見てゐる。」——自身が残した言葉が示す通り、そのコレクションは独自の審美眼をもって収集されていて、現在国宝に指定される、浦上玉堂(凍雲節雪図)と池大雅・与謝蕪村《十便十宜図》をはじめ、古美術から古賀春江・草間彌生などの近現代美術、さらには西洋美術にまで広く及びます。その貪欲で精確なまなざしから、時に“美の狩猟者”とも称されました。また、さまざまな美術家たちが川端の著書の装丁を手掛けたことで、彼らとの親交がありましたが、とりわけ戦後を代表する日本画家・東山魁夷(1908-1999)とは互いに崇敬する間柄であり、川端コレクションには東山作品も多く含まれます。そして、川端に感化され、東山も美術品を収集しました。

本展は、川端・東山それぞれが収集した美術品を紹介しその審美眼を探るとともに、数々の東山作品も展示することで、二人の巨匠の交流の軌跡をたどり、追求した美の世界に迫るものです。美術品以外にも、近年川端邸で新たに発見された、『伊豆の踊子』のモデルとなった初恋の人・伊藤初代への手紙や、夏目漱石・太宰治など文豪の書といった、文学ファンも注目の資料も公開します。

さらに、愛媛会場での特別コーナーとして、川端・東山と愛媛とのゆかりを示す作品・資料もご紹介しします。川端が脚本を手がけた日本初のアヴァンギャルド映画『狂った一頁』(1926年、監督：衣笠貞之助)の主演をつとめた俳優・井上正夫(1881-1950)や川端が敬愛した俳人・高浜虚子(1874-1959)ら愛媛出身者との関わりや、東山が瀬戸内を題材に制作した作品などを展示します。(長井 健)



国宝 浦上玉堂(凍雲節雪図)江戸時代(19世紀初) 公益財団法人川端康成記念会蔵
展示期間：9月1日(土)～3日(月)、10月10日(水)～21日(日)
※上記期間以外は、複製を展示します。

砥部 東京 ヘルシンキ

企画展 石本藤雄展

マリメッコの花から陶の実へ

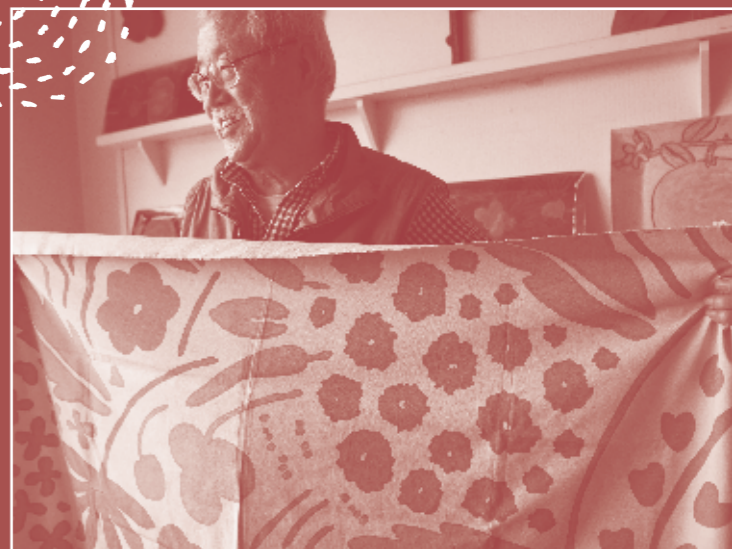
平成30年 10月27日[土]～12月16日[日]

森と湖の王国として親しまれているフィンランドの首都ヘルシンキ。愛媛県砥部町出身の石本藤雄は、この街に居を構え、「マリメッコ」のデザイナーとして、また「アラビア窯」のアート部門にアトリエを構える陶芸家として最前線で活躍してきました。

日本でも人気の高いライフスタイルブランドである「マリメッコ」は、アルミ・ラティアによって1951年に創設され、斬新で且つ普遍的な独自の様式を築き、世界中から多くの支持を得て現在に至っています。石本は東京藝術大学で学び、広告デザイナーの仕事を経て単身世界各国への旅に出かけます。そして、辿りついたのが以前から気に留めていた、アルミのいるマリメッコであり、まずはその息子が立ち上げた子会社での仕事から始まりました。

今回マリメッコでの復刻が決まり、展覧会でも商品化に先駆けて紹介する「ONNI(幸せの意)」そして「SUVI(夏の意)」は、まだ無名だった石本がデザインし、マリメッコの商品として名前を伏せて発表されたものです。いずれも可愛らしく大胆で明確な花をあしらった意欲的な作品と言えるでしょう。

石本は、身近な花々を始めとする自然の風物をモチーフに、これまで数多くのデザインや陶芸作品に取り組んできました。本展では初公開となるデザイン画や原画、また自身が制作の構想を練るために日常的に撮りためた写真なども、作品と合わせて一堂にご紹介いたします。さらに当館コレクションとのコラボレーションにも取り組み、陶器による新作も制作予定です。(杉山 はるか)



「SUVI」を持つ石本藤雄氏